

京交山岳部報

No 275

75 9月号

[第1051回例会]

不動山と千回沢山

(T)

日時 9月13日(土)~15日(祭) 13日午後出発予定
 コース 京都-大堰-門入-入谷より不動山、千回沢山登頂 1/5万図「冠山」
 担当者 本局 宮後正樹(TEL 251) 申込み〆切 8日(月)
 備考 今年の奥美濃シリーズも後半に入りました。部員の皆さん、一度は当シリーズに参加して奥美濃のよさを味わってみて下さい。

[第1052回例会]

お月見登山と家族キャンピング

(R)

大江山

日時 9月20日(土)~21日(日) 20日14.00 西京極体育館前出発
 コース 京都-福知山-大江町-普甲峠(キャンピング)...大江山登山
 担当者 九条第二 鷺見敏一(TEL 649) 申込み〆切 16日(火)
 携行品 シュラフ、食器等 食糧は共同購入 1/5万図 「大江山」

[第1053回例会]

南鈴鹿

那須ヶ原山

(R)

日時 9月23日(火) 6.40 京都駅2番ホーム集合
 コース 京都-草津-油日-油日神社...油日岳...三国岳...那須ヶ原山...坂下峠...高畑山...鈴鹿峠-草津-京都 1/5万図 「亀山」
 担当者 横大路 牧野 健(TEL 601-9391) 申込み〆切 19日(金)

リ - タ - 会

9月10日(水) 午後7時から 坂井宅

夏山写真交換会

8% 映画会もやりますので、山の8% 記録映画をお持ちの方は 持参してください。

日時 9月22日(月) 午後6時から 下鴨寮

。 今 月 の 集 会 。

- 日 時 9月18日(木) 午後7時から 下鴨寮
- 議 題 1. 例会(仮1050~1051) 部員動静 報告
2. 10月例会(奥美濃、他) 集会(九条第二)について
3. お月見登山と家族キャンプ打合せ
4. 連絡事項 その他

- 当番 九条第一支部 -



ク リ ー ン 作 戦

宮 後 正 樹

夏山たけなわ、北アルプスをはじめ山や観光地など夏のレジャーのメッカを抱える長野県では、今年も山や観光地の汚染がひどく、周辺のキャンプ場や民宿からの下水が流れ込む千曲川、犀川をはじめ天竜川や白樺湖などの水質が大腸菌で汚され、MPNが異常アップしているという。

また今年は遂にマイカーの入山禁止に踏み切った上高地では、入山者が例年より2、3割減ってゴミの方もこれに比例して少なくなったものの過密レジャーで、し尿の浄化が追いつかず、梓川でも大腸菌に汚されているという。

そこで長野県では、まず建設省へ下水道対策を要望するとともに受益者負担による汚水処理対策、つまり宿泊料にし尿処理料をプラスして取ることを検討しているという。

さらに上高地の実績を踏まえて観光地の入山規制の設定を環境庁に求めたいとしている。環境庁といえば、年間50万人のハイカーが訪れる日光国立公園の尾瀬ヶ原では、去る45年頃から、公害が問題となり、環境庁尾瀬保護センターのアイデアで「尾瀬クリーン作戦」が展開されて来た。これは先ず「ゴミ持ち帰り運動」から始め、大清水、鳩待峠など5つの登山口にゴミ持ち帰り用の紙袋をハイカーに手渡しして警告したものだだったが、依然としてゴミ箱はあふればなしであった。そこで考えられたのが「ゴミ箱があるからゴミを捨てるのだ。もしゴミ箱がなければ…」という発想転換のアイデアであった。

こうして48年のシーズン前には尾瀬ヶ原からはゴミ箱が姿を消し、また「休まずに歩けば、弁当のカスやジュースのカンも出ない」と8カ所あった休憩所を4カ所に減らしてクリーン作戦をやった結果、3シーズン目を迎えた今年になって湿原は目を見はるほどきれいになったという。環境庁ではこの報告をモデルケースとして、今後は上高地などハイカーの多い国立公園にも応用する方向で検討したいといっている。

成功したゴミ持ち帰り運動は、山を自然のままに美しく、をテーマにもう6~7年も前から京都

岳連が全国に先がけて日本山岳協会にも提案し推奨して来たところであるが、その方法の一つであるジュース缶や菓子袋などに自然保護をうたえる文章を刷り込ませ、ゴミ公害を撲滅しようというものだった。

先日たまたま自動販売機で買ったあるメーカーのジュース缶に「あきかんはくずかごに」というのが刷り込んであって何だかホツとした気持ちになったが、概してジュースやコーヒー、サイダーなどの缶類には“お願い”として、空缶は空缶入れかごに投入して下さい。車窓からすてないようにご協力下さい。といった文章が印刷されているが、菓子袋の方は殆んど見かけない。ただ一つ京都東山のメーカーによる菓子袋に赤字で「Keep Japan Beautiful」とあり、その下に「町をきれいにしましょう。たべおわたあとのあき袋は、くずかごにすててください。」という注意書きのあるポップコーンの袋を見つけてうれしかった。

今年もまた山の清掃運動が10月5日に設定されている。

美しい自然を守るのは人間だけである。こんな運動の必要がなくなるように、山を愛する岳人こそ、その範とならうではないか。

△ 1196.8 左千方

宮 後 正 樹

梅雨の切れ間をねらって、早朝6時に京都を出発したが、湖北の山あいに入ると暗雲たちこめてどうも天候はすっきりしない。

木之本町から北国街道を走り、中之郷から丹生の部落を経て高時川を北上する。693m 七七頭ヶ岳(ななのが岳)の登山口上丹生を過ぎ、次の菅並までは今もバスが通っている。どっしりとした菅並の集落を抜けて左から流れて来る妙里川を渡ると急に道は細くなる。妙里川には曹洞宗中本山の古刹洞寿院がある。

小原、田戸と小さな部落が続くが、いずれも豪雪と降雨、低温の生活環境から深刻な過疎状態となり、この奥、奥川並、尾羽梨、針川の集落は共に集団移住に踏み切り、今はもう人影もない。

「どんなに山奥でも、峠を越せば村があるというなら救いがある。けれども

ここには山以外何もない。ブナの原生林も切りつくしたらもう何もない。

暗くわびしく、やりきれない思いの丹生谷である。」

近江山の会の伏木貞三氏は“近江の山々”にこう書いておられる。

尾羽梨谷を跨ぐ橋のたもとで車を止める。ひっそりと静まりかえったカヤ葺きの貧しい家々が、分枝が山深い谷に沿って佇んでいた。地図を開いて調べていると、思いがけない人影に驚かされる。「今は大阪へ出ているのだが、夏だけ避暑に帰って来るのだ」という老人が出て来て、今日は菅林署の人たちとこの上の安蔵山へ行くので待っているのだが、天気があやしいのでまだ来ない。と車に入って来た我々を間違えたらしい。三国ヶ岳の左千方へ登るのだと話すと、左千方というのは知

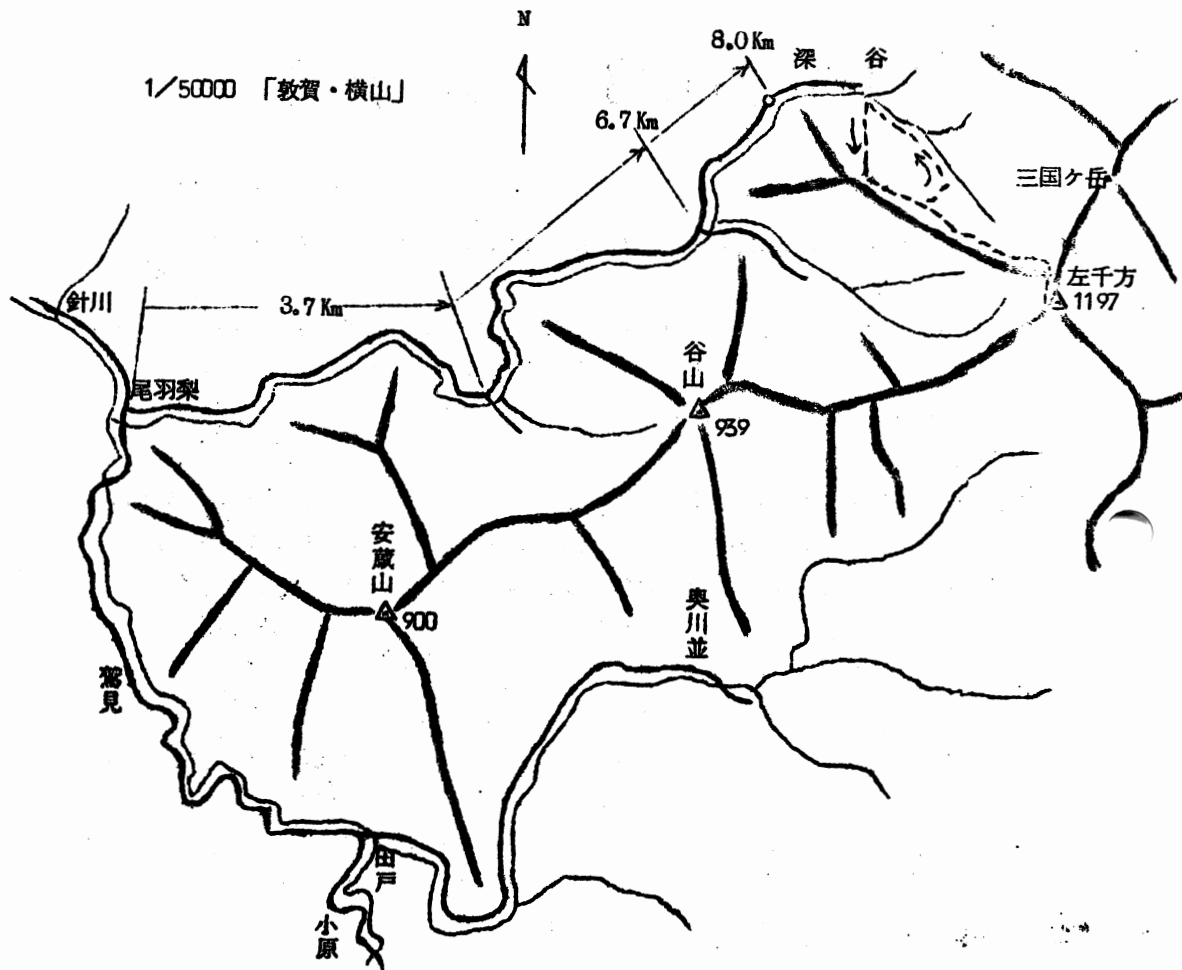
っていたが、どうもあやしい。急にはげしい雨となり林道の様子を聞いて別れる。

大きな水溜りや凹地に板を渡した林道に時間を喰う。吉田君の軽と小生の車巾が違うので、その都度板を移動しながら進む。尾羽梨から3.7km地点で△989m 谷山の方へ入っている林道を分け、さらに3kmほど行った所で2本目の林道が西へ上っていた。われわれはとことん林道をつめ、広くなった8km地点で車を止める。雨はやゝ小降りになったが、依然として降っている。

雨衣に身をかためて出発するが、皆んなこの雨に物も云わず元気がない。このところ奥美濃に大張り切りの牧さんをはじめ武田君、三橋君にジャツカン吉田君と今日は珍客の木原、清水両君の参加を得て7人のメンバーである。

なおも奥へ続いている林道は荒れていて、車はもう入れないが、30分余りで林道は谷の分岐から左手へ大きく折れて上っている。目指す三国ヶ岳はガスにつつまれ、1000m 辺りから上は何も見えない。とにかく今日は三国ヶ岳の南にある左千方と呼ばれる1196.8mの三角点だけでも踏んで帰ろうと偵察の末、少し手前から谷を渡り、北西稜めがけて伐採の植林帯を急登する。

灌木の斜面を横切って再び谷通し、ヌレネズミになって廻る。やがて小谷もツメとなり 920m



辺りの稜線に突き上げる。時間はすでに12時を廻っている。立枯のあるやゝ平らかな熊笹の中で冷たい昼食とする。ガスを伴った稜線の風はズブ濡れの身体に容赦なく吹きつけ、皆んな青い顔をしてガタガタ震えている。どうも今日はこんな予感がした。とつくづく後悔している木原君、三国ヶ岳というから良い道でもついていると思っていたのだろうか。

3時まで頑張ろうとハツバをかけてヤブを漕ぐ。熊笹と灌木の入り混った稜線は5万分の1図の点線路を物語る古いナタ目などの人跡が途切れ途切れにあって元気づけられた。しかしすっかりガスの中に入り込んで、視界は全くゼロである。何回かのトップ交替をくり返して、ようやく滋賀、岐阜の県境に達した。朴(ホウ)の木の大きな白い花が迎えてくれた。やゝ右寄りにもう一目散にヤブを分けた。やがて前方が急に切れてピークであることに気がついた。一行が登って来たのは、それから何分か経ってからだった。

灌木の中に航空測量のハツボースチロールが散らばっていて山頂であることを確認し、三角点を採した。これは何だと誰かが蹴飛ばしたのが、1196.8m左千方の三等三角点だった。時間は14時50分、正に時間切れ寸前であった。

こみ上げる喜びをかみしめ、萬歳を三唱して震えながら鐘ビールでカンパイした。そうして三角点標石の根っ子から、47年11月5日賀嶋増造氏と登頂された伊藤潤治氏の名刺を古びたビンの中に発見し感激した。古いビンのふたは錆びて穴があいていたが、中に入っていた一枚の紅いあざやかなモミジの葉っぱが印象的だった。牧さん持参の新しいビンの中に、我々のサインとともに納めて下山とする。

ホウの白い花を送り下る。ところがしばらくで急に斜面がきつくなり、これはおかしいと気がつく。地図を出して磁石をあてると大変だ。東へ下っているではないか。これでは岐阜県側へ下ってしまう。焦る気持ちを抑えて稜線へとバックする。再びホウの白い花を確認して、今度は慎重に磁石を頼りに尾根の踏みあとを確かめながら下った。ようやく立枯の立つ昼食地点に戻ったのは、頂上から2時間も経っていた。

登りに横切ったルンゼ状の小谷を下り深谷に合流した。林道端の二股は5mほどの壁となっていたが、木にぶら下るようにして全員無事林道に戻り、一人づつ感激の握手をし日没とともに車に帰ることが出来た。

着替えをして8kmの林道を後に尾羽梨のおじさんに無事帰着を告げて高時川を下った。車の前を飛び交うホテルの淡い光が左千方の登頂を祝福してくれるかのようであった。

〔参加者〕 牧 定夫、武田喜久郎、三橋 勉、吉田 武、木原 滋、清水 謙、宮後正樹

〔コースタイム〕

6/23(月)	6.00	京都発	17.15	昼食地点
	9.30~9.45	林道終点	17.25	池の下、ルンゼを下る
	10.15~10.25	左岸小尾根へ	17.55	深谷合流
	11.10	小谷へつめる	18.30	林道端、二股
	12.40~13.00	920m辺り、昼食	18.45~19.15	車
	14.50~15.10	▲■ サセンボ	24.00	帰京

尾瀬と上州の山旅 (2)

五条 翠 峰

阪東太郎とか、大利根とか云われる利根川の源流の湯小屋で一夜を過したが、このあたりの地名藤原について興味ある話を知ったので少し書きます。

全国に平家の落人伝説の部落は数多いが、この藤原なる地名は、公卿の藤原と違い、奥州平泉に中尊寺金色堂を建てた奥州藤原氏の一族が此の地に落ちのびたのに因んでいる。

文治5名(1189年)閏4月、藤原泰衡は亡父秀衡にかくまれていた義経を、頼朝にそゝのかされて衣川の館を急襲し殺してしまった。その後頼朝は奥州平定の好期とばかり、義経をかくまっていたことを責めて、30万近い大軍を率いて遠征し、藤原一族を滅亡させた。歴史では、一族は滅亡したことになるが、実際は藤原東学坊の一族郎党53人が越後の親戚を頼って落ちのびようとして上越国境で迷い、利根川の源流のこの地へ下ってしまった。そして最奥の大芦にたどりつき、此の地に定着した。然し藤原の姓のまゝでは源氏の追討が怖いので、この地の先住豪族中島孫左衛門に事情を話して中島姓を譲受けた。然し藤原の名を捨て去ることが出来ず、この地を藤原の里と呼ぶことにしたとの伝説がある。

又、湯小屋の下流に湯檜曾温泉があるが、この地も奥州の豪族安部一族が住みついたとの伝説がある。源頼義に亡された安部一族の弟の家任・盛任・境冠者の3人は逃亡を重ね、尾瀬に住着いた。そして城を築いて本拠としていたが、下って鎌倉時代に足利義教の軍に攻落され、時の城主貞道は子と共に落ちのびたが、後閑で自殺した。しかし三男の阿部孫八郎貞次は、父や兄とはぐれて山深い谷間を下って行き、湯煙の立つ湯檜曾の地を発見して住付いた。湯檜曾なる語は、湯にひそむの義である。後にこの一族は繁栄して沼田城主に出仕するようになり、現在も子孫が続いている。この地の一畝田に安倍貞任の信仰した薬師如来を祭る「安倍薬師堂」がある。

7月10日早朝、弁当2食を持って出発。バス停から上の原へ九十九折の急坂を登る。登りが緩くなって雑木林を抜けると、上の原高原の一端に出た。処々に白樺や湿原のある広漠たる草原である。大芦から上ってくる通との合流点で朝食をとり、山の家へ向う。途中水芭蕉の群落地やスズランの群生地があり、丁度志賀高原をしのばすような処である。

高原を南下する林道を進ると、谷間に山の家の赤屋根が見えてくる。谷沿いに林道をつめ、終点から小道を登って△1635mの肩に上る頃から雨になった。尾根筋に出て暫く上り下りを繰返し、左に避難小屋のある分岐に出た。この辺りから岩場をまじえての急坂で、鎖や岩角を利用して岩場を上りつめ前峰に出て一息つく。こゝがもう頂上と思って登って見れば、コルを隔てて一峰が聳えている。後はよい道で、もう一ピッチで標識や碑の立つ武尊山山頂へ。雨も上り、こゝで昼食をしたが、ガスで展望は近くの剣ヶ峯や前武尊位で、途中眺めた上信越の山々は雲の彼方だ。

こゝから下りが難場との注意があった。武尊牧場への分岐を過ぎ、2105mの独標に登って一旦

コルに下り、剣ヶ峰の急坂を登りやれやれと思ひもなく深いコルを隔て、龍武尊が聳え立っている。この間に岩場や剣の刃渡りの難所が連続している。巾30cm位の滑尾根を股いで通り、鎖を頼りに岩壁を攀ち登り、上り下りが相つぎ、くたくたになってしまうが、体力、氣力をふりしぼって三等三角点に登り着いた。このピークや途中の岩峰に、仏像や行者や武尊梅現の碑が沢山立っており、上州一円の修験道の聖山の感を深くした。

ここから川湯への下りも、多くの岩峰の上り下りがあり、地図に表われない岩やピークがあった。途中に標識があったが、ハイカーには向かぬ険阻な山と云えよう。ようやく杉林の谷間の急坂をジグザクに下り川湯川の源流に出て喉を医す。ここから道はよく、キャンプ場を経て林道終点の駐車場に出た。そこから川沿いの林道はなかなか長かった。やっと木賊に着いて食堂で夕食をとり、バスで沼田へ出て東京へ向った。

翌11日、東京の旅館で一夜を明し、エーデルワイスの板倉さんを訪ねたり、国土地理院を尋ねりして、夕方新幹線で帰京した。

コース・タイム

7/10 6.10 出発 - 6.20 バス停登山口... 7.10 ~ 30 十字路... 8.35 ~ 40 林道終点... 9.30 ~ 10.00 尾根筋(三叉路)... 10.20 小屋分岐... 11.40 前峰... 11.56 ~ 12.15 武尊山... 13.59 ~ 14.00 前武尊山... 14.45 ~ 15.00 岩峰... 15.40 ~ 45 分岐... 16.00 水場... 16.25 駐車場... 17.50 ~ 18.35 武尊(木賊) - 19.20 ~ 24 沼田 - 21.30 東京赤羽

南ア兔岳から聖岳へ

五 条 翠 峰

7月21日京都駅を7.57発のこだま号で発ち、豊橋で伊那1号に乗換えた。平岡で下車、信南交通のバスで遠山川沿いに走り和田に着く。ここでバスを捨て、昨年世話になった米屋に行って爺さんと会い、久しぶりの再会に喜んで迎えられる。ノートに署名を求められたりしてライトバンで砂防ダムのところまで送ってくれた。

昨年と同じく本谷口から軌道跡の林道を走り、北又渡で橋を渡って北又川へ入り、砂防ダムに着いた。ここから大沢渡迄延々と10余kmの軌道跡を歩かねばならない。枕木の欠けた鉄橋を二三度渡り返し、山百合の咲誇る遠山川の清流を眼下に眺めてひたすら歩き続けた。

大沢へ橋を渡って入ると大沢渡キャンプ地の標識があった。此処迄全然標識はなかった。急坂を上り、今夜の宿大沢山荘へ。既に小屋は満員近い状態で、二階には地元の中学生の団体が一杯。索泊り800円で、食事・寝具なし。ガイドブックを頼りにするとひどい目に会う。南アはテントやシユラフ、食料はかゝせない。

明けて22日、樹林帯の長い登りだ。道は西沢渡の道より良いが、唐松峠迄が長く、何回となく休んでは登り、休んでは登り、漸く峠を越し、樹林帯を越えダケカンパの茂る森林限界に達した時

はほっとした。ここからは一段と急坂の岩層のジグザクで、汗がすぐふき出す。大沢岳のコルに着いた時はほっとした。大沢岳へ空身で往復して百間洞の山の家へ向った。下り約30分と聞いたが行けども行けども谷底で、小一時間かゝった。もう登りがないと気を抜いたためであった。

小屋に下る道はダケカンバやハイマツの間に高山植物のお花畑があり、シナノキンバイ、ハクサンフクロ、ヨツバシオガマ、ハクサンイチゲ、ハクサンチドリ等が目を楽しませてくれた。小屋は余り広くなく、水場は近かった。夕食を早くとり、早くシュラフに入って明日にそなへた。

明けて23日、一同元気で出発。稜線迄約1時間で登り、一服して中盛丸山の急坂をジグザクに登った。この山は三角点はないが展望が優れ、晴天の為か遠く槍・穂高・御岳・木曾駒・恵那山始め、塩見・荒川・赤石・甲斐駒・仙丈、南に兎岳・聖・上河内と周辺の山々がパノラマ状に指摘出来る。暫し大展望に皆と吾を忘れて山頂にたゞずんだ。

急坂を下って又登ると、小兎岳、又少し下って登りつめると兎岳に着いた。三角点は山頂より約400m程西にあり、一同荷物を置いて三角点へ。途中に遭難碑があり、道松の中に道がついてゐた。ここで一同万才三称。乾杯して元に戻り、急坂を下り避難小屋に預ったノートを吊して聖岳のコルへ。途中、島根・金沢・東京と各大学の山岳部やワングルと出会う。コルのすぐ手前で昼食をして荷を軽くして念願の聖へアタック。コルから左手の赤石沢の源頭の水場へ下る道が分れていた。岩層の急坂を休みをとって登りつめ、山頂に達した。念願の南ア最後の三千m峰に立った感激は大であった。ここでレモンティーを作り、蜂蜜で疲労回復を計り一服して荷物を置いて、奥聖岳の三角点へ往復した。途中残雪が一面にある凹地や岩峰を通して三角点へ、一同万才三称してパイ缶を切り、山の神に供えた後お下りを頂いた。こゝも展望は良く、赤石沢の源流の河谷や聖沢、その間の尾根筋の東尾根やその中の三角点、白蓬の頭が見えた。折からガスが舞上っていたので、遠くの展望は駄目だった。元に戻り、後は聖平小屋へ下るばかりだ。ジグザクで岩層の急坂を下って尾根が痩せてくると、右手遠山川側に岩間からしみ出る水場があり、一同喉を潤す。道端にミヤマオダマキが美しく咲いていた。小さな登り下りを繰返し、ダケカンバの茂る処に下った頃、夕立が来てたちまち道は小川となり赤茶色の泥水を流す。雨の為ノンストップで聖平小屋へ早い内に入れた。夕食にソーメンを作って食べたが、好評であった。小屋にビールがないのが坂田、台川両氏の不満であった。

翌24日早朝出発。未だ月が出ていて薄暗いが、テント組の学生パーティは出発していた。上河内岳迄ひたすら登り、前衛峰に四等三角点を見る。コルに荷物をデポして上河内岳へ。約10分位で登頂。此処も展望は広大で360°に展けており、聖・赤石が大きく北方に立っていた。南に茶臼、光岳の山々が連って見えた。西に遠山川の深谷がフカンされ、東にこれから下る上河内沢や大井川の河川が見えた。万才三称後コルに下って茶臼へ。この辺り道端に岩キキョウが咲いていた。竹内門をくぐり、亀甲状土を通り、茶臼の分岐へ。

ここから尾根筋の急坂を嫌と云う程下って横隄小屋へ。こゝの小屋の管理人から畑雑ダムの人々手紙を託され、お茶を御馳走になった。沢を渡り、急崖を登ってコルに達し、尾根筋をまいて下ったり、ジグザクに九九折を下ってウソツコ小屋へ。危い吊橋を渡って沢に下り一息する間に、釣道具

を出して釣ったが釣れず、小屋へ行って昼食をとり、沢を下って本日は赤石ロッジに泊ることにした。吊橋を二三渡って沢に下ると、畑窪ダムの吊道に通ずるヤレヤレ峠道の分岐に、吊橋工事の為迂回路の標識があり、左の沢沿いの道を通る。すぐ川に下って岩場がヘズリや仮橋を渡り対岸へ。こゝ迄はよかったが、後は沢沿いの仮橋は傾き、急崖を攀じ登り、急坂を越え、大井川沿いに山腹を高巻いて3km上流の橋迄悪路危路を歩かされた。

馬鹿長いダム沿いの林道を畑窪ダムへ。この少し手前で車をヒッチして赤石温泉ロッジへ4時前に着いた。温泉は加熱していて重曹硫黄泉で源泉は43°とのこと。湯に浸り、汗や垢を流し、一同ビールで乾杯、無事下山を祝した。

翌25日、バスで井川駅に出て大井川鉄道に乗換え千頭に出て急行に乗りかえ、金谷に出て東海道線で浜松に行き、又新幹線に乗換えて一同無事帰京し、駅で解散した。

参加者 五条 坂井久光、北野 坂田利春、台川敦美、

コース・タイム

- 7/21 7.57 京都駅- 8.27 ~ 54 豊橋- 10.55 ~ 11.20 平岡- 11.53 ~ 12.35 和田...
13.30 ~ 55 北又砂防ダム... 15.45 ~ 16.00 第2ダム... 18.30 ~ 19.00 大沢渡...
19.30 大沢山荘(泊)
- 7/22 5.00 出発... 7.55 ~ 8.25 唐松峠... 11.30 ~ 12.00 昼食... 12.35 ~ 50 大沢コル...
13.09 ~ 15 大沢岳... 15.30 百間洞山の家
- 7/23 5.00 出発... 6.00 ~ 15 コル... 6.35 ~ 45 中盛丸山... 8.35 兎岳頂上... 8.43 ~ 56
兎岳三角点... 10.05 ~ 11.00 コル昼食... 12.45 ~ 13.25 聖岳... 13.40 ~ 50
奥聖岳三角点... 14.35 ~ 40 水場... 15.45 聖小屋
- 7/24 4.25 出発... 5.55 ~ 6.05 四等三角点... 6.30 ~ 35 コル... 6.42 ~ 55 上河内岳△...
7.52 ~ 8.00 茶臼小屋手前の峠... 9.25 ~ 40 横窪小屋... 10.40 ~ 11.40 ウツツコ
小屋昼食... 12.15 ヤレヤレ峠分岐... 14.00 林道の橋... 15.50 赤石ロッジ
- 7/25 10.37 バス乗車- 11.40 ~ 12.20 井川駅- 13.53 ~ 58 千頭駅- 14.54 ~ 15.03
金谷駅- 15.51 ~ 16.19 浜松- 18.11 京都駅

弥山川から八経ヶ岳・行者還岳

錦林 大 槻 雅 弘

真夏の太陽を見ると、北アルプスへ行きたい。毎年、8月上旬に合宿をしていたのが、今年はとりやめになった。その変りに、私が個人例会として谷川岳の計画を出したが、体の調子が悪く中止した。休暇も予定していたが、残念である。リーダー会議で中止を伝え、前から行きたく思っていた弥山川に計画変更し、8月の3日間を、大峰山系に足を運んだ。

8月10日 8時30分。2台の車に分乗して一路奈良路へと車を飛ばす。100kmの行程を途中川合で昼食をとり、弥山川と川迫川の出合熊渡に着いた。

京都を出た時から天気はかんばしくなく、空は曇り空。時々小雨もパラつきど日も夏空は望めそうもない。早速登山準備にかかり、新しく出来た林道を弥山川に沿って出発。林道は谷と100m程の高度差で続き、25分で材木の切出し場に着く。そこから左へ下る小道があり、杉の老木の陰気な道を5分で谷のエン堰に出た。八丁河原である。谷の名称は、双門の大滝迄は音無川、その上部を弥山川と呼ばれている。ここ迄は、旧道の吊橋を渡って歩くよりも時間的に早いようである。広い川床を歩き、最初の滝釜滝へ出る。5m程のその滝の前で男女も人が食事をしていた。

ソーダ水で咽をうるおし、ケルンに導かれ右岸沿いの道を高捲く。すぐに弥山ダム、続いて砂防ダムに出る。やがて又、河心に降りる。2時10分。前方に双門の滝ぐらいになるのか、急峻な山肌が見える。その上、空にはサーカスの空中ブランコのように、ワイヤーに吊下げられた木がぶら下がっている。巨岩のうまった岩上で一休みする。

谷心を外れた道は、やがて垂直ぎみにかけられた赤い鉄梯子の連続となる。膝を打つ程に、真直な登りにまいる。2時30分、双門、第一、第二の滝へ出る。二段続きに落ちる滝は、途中岩棚に水が当り、見事な景観を呈している。両方合して下の滝と呼ばれ、50m近く落差はある。その手前の今にも落ちそうな階板で渡された吊橋を渡り、滝の上部へ出る。約10分、今度は15m程の第3の滝に出る。道より10m程降り立ち、滝を正面より見る。

連続に赤い鉄梯子がかかった道、登るのもつらいが、運んだ人達はもつつらかったらうと思う。汗はしたたりおちる。振り返れば、白川八丁の白い河床がうねりながら下方へ続いている。先程大きな岩あたりで休憩した時見上げていた場所を、今、登っているのだ。3時50分、双門大滝を見わたす展望テラスに着く。テントが2~3張り出来るこの地から、見事な滝が正面に見える。それに続く仙人岩も又見事である。以前に、大杉谷へ行ったが、又違った谷であり、滝である。落差約60m、眼下にその清流が、水際からそり立つ岩壁は、人を寄せがたい感である。

本日の行動は、双門大滝でテントを張る予定である。だが、余りにも陰気で、水留りの出来たこの地にテントを張る気もせず、もう少し歩く事にする。急登に鉄梯子の30分、双門への分岐点に着く。奇勝、双門を見なければとザックを置いて出発。分岐点より左に道を取り、樹林の間を少し登って山腹を捲く。小雨が降り出し、ガスも出てくる。雨足もはげしくなり、周囲はガスで何も見えない。トップの武田さんと相談し、残念だが引返す。

樹林の中、雨でもうあたりは薄暗い。時計を見ると5時15分。早くテント地を見つけねば、全員ずぶぬれの体がベテてしまう。重くなったザックを担ぎ、急坂を下り河原に出る。20分程でテントが張れそうな所に出る。でも、増水を考えると河原には張れない。三湖の滝も過ぎ、もう少しで河原小屋だということで頑張る。「あつぞ！」武田さんの声に、ホッとす。河原小屋である。

無人の小屋は、予想していたより立派な造りで、先客もない。早速、濡れたものを着替える。雨は以前として強く、テントを張っても濡れるだろうと思うとありがたい。暖かい飲み物で、腹もおさまり一段落する。そこへ、2人連の若者が入って来る。我々より先発していたが、道に迷い遅れ

たらしい。食事の用意も出来、先程のしんどかった登りも忘れ、腹一杯ジンギスカンを食べる。雨は止みそうもない。明日もある事だし、早々にシュラフにもぐる。

8月11日、5時30分起床。雨も止み、雲間には青空ものぞいている。谷川のせゝらど、小鳥のさえずりが山の朝を告げる。いつもながら、山の朝はいいものだ。今日も濡れるかも知れないと思ひ、昨日の下着を着る。スパゲティの朝食も、ひとかきで終り、7時15分出発。

武田、牧、大槻、吉田、山田、岡本と昨日からの隊列で歩く。小屋からすぐに左岸を渡り、道は続く。ナナカマドが先枚真赤に色ずいている。谷の水は雨水のにとりもなく、川床の石をすき透している。頂仙岳(朝鮮岳)直下を通過する当りの岩場で休憩する。吉田君は最初から地下足袋なのでよいが、他は靴のまま谷を歩いて来た。スリッパもするし、危険なのでワラジをつける。牧さんと武田さんは、へつりながら進み、残りは谷心を歩く。

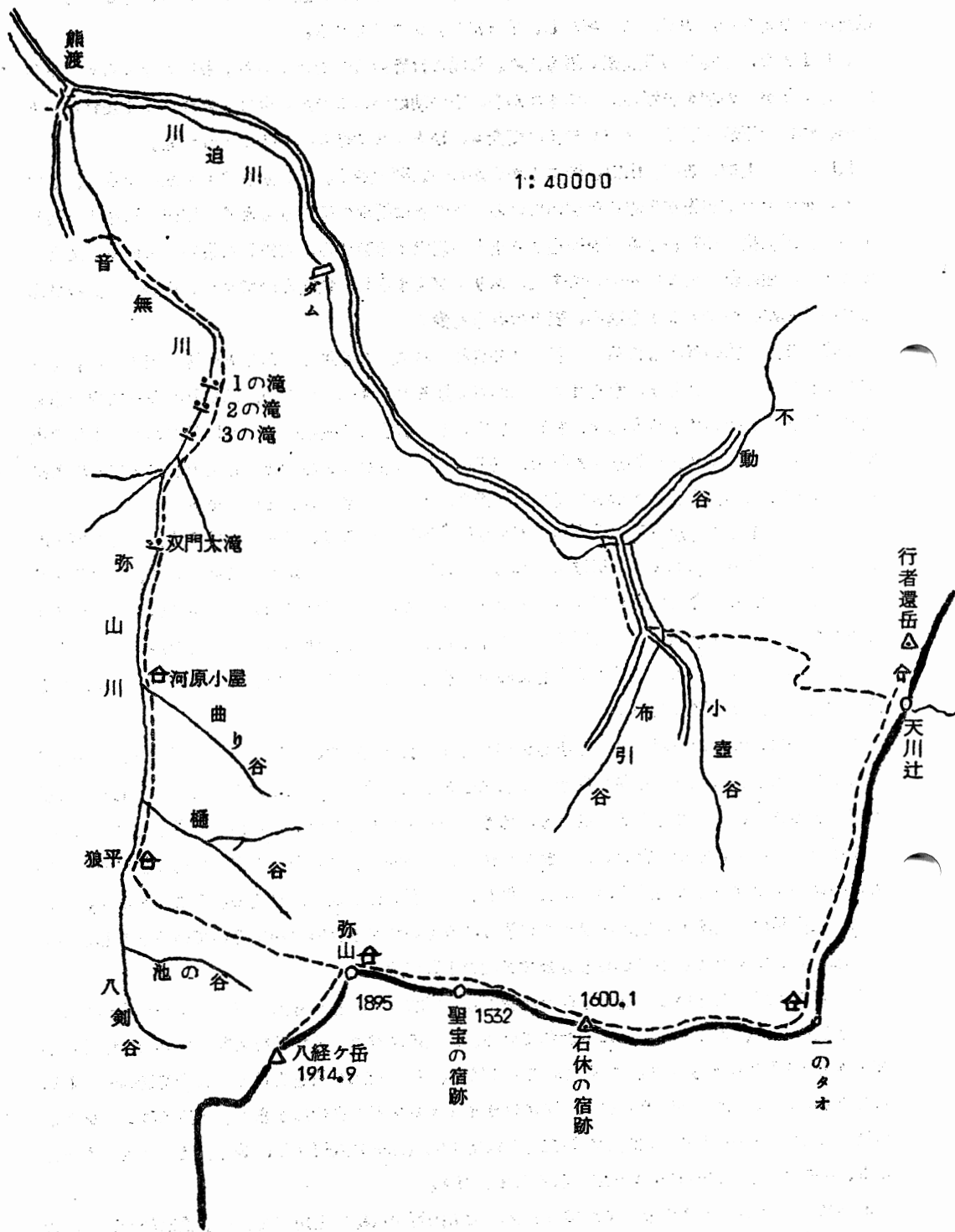
8時20分、樋の谷出合に着く。谷は2分され、右に大きく曲っている方が弥山川である。トップの私が3m程のナメ滝を、水をまともにかぶり登るが、すべて無理。岡本君は左へ右岸の岩を登り通過する。続いて小さな滝を、左岸の岩を登る。右手に5cm程の岩のさげ目があり、小鳥の巣を見つける。すでにヒナが巣立った後で、玉子のぬけがらが4ヶあった。こんな所かと思ふ場所に外敵から守る為か、人目にもつきにくい所を選び、巣を作っているのに感心する。

すべらないようにと思っている内に“バシッ!!”横向けにこけ、ずぶぬれになる。大きな声を出したので岡本君が心配して声を掛けてくれる。右には8m程の滝がかかっているの、左のリッジを登り上部に出る。今度は完全にロッククライミングだ。左岸沿いに道を登った武田さんにザイルを下してもらい、4m程の岩を乗越す。その上部はトロになり、泳がねば無理との声で、左岸を石楠花につかまり道に出る。道はすぐ谷心に降り、少し開けた明るい所を2度程蛇行する。やがて5分程で吊橋を渡り狼平に着いた。

この狼平は、昨夜の小屋より少し小さいがしっかりした建物で、周囲はテントも張れ、宿泊地には適地である。我々はその小屋の周囲の小石に腰を下し一服する。天気は今にも降り出しそうな曇り空かと思えば、時たま青空を見せたり、もう一つかんばしくない。これからは谷とも別れ水場もなくなるので、全員水筒を満タンにし狼平を後に弥山へ向う。30分程の樹林の道を抜けると、山火事の後のような開けた場所に出る。日が射し、振り返れば頂仙岳が見える。そこからは又、じめじめした樹林の中を歩く。山の小鳥たちに混り、うぐいすがきれいな声で鳴いている。むしろ暑さも一時忘れさせてくれる。狼平から55分で弥山の小屋に着く。

大正時代に建ったという大きな古びた小屋(社務所跡)に、5~6人のパーティーが先着していた。小屋の人は、ゴミの後始末におわれている。弥山に着けば、まず乾杯と言っていた〇〇君、缶ビール600円也にビックリ。でもせめて一口はと、2缶1200円を支払う。大峰奥通道の石碑にしたがい、八経ヶ岳へ向う。途中の道にはオオヤマレンゲの自生地があり、石碑も建っている。最後の登りを一気に上り、近畿最高峰二等三角点1914.9mの八経ヶ岳に着く。まってきたとばかり、一口100円也のビールを回し飲みして、万才。

あいにくガスが出てきたりして展望はダメ。でも山行中最初の三角点で、近畿最高峰を踏み、皆



は満足である。キュウリ、ササミ等で腹のたしにし、弥山へ引返す。往復1時間費す。

弥山の1895mから聖宝の宿跡1532mまで一気に360mの下りは、足をガクガクさせる。登りもつらいが、急坂の下りはなおつらい。約30分、醍醐天皇の頃(905年頃)山上ケ岳から奥通りを開通させたという聖宝理源大師像のある所に着く。

息をととのえた後、原生林の静かな道を、時折日も射し、ゆるやかな登り下りを進む。右手は大台ケ原のドライブウェイ、それに続く山なみも見える。マップの時間どおり30分で1600.1mの三等三角点に着く。山名は無いが、案内書には石休の宿跡と記してある。ジュースで咽をうるおしひと心地がつく。

きれいな熊笹の中を左手に大日山、山上ケ岳を見つつ進む。1時45分、天ヶ瀬へ降る分岐点、一の峠に着く。一の峠から道は、東から北に向う。左手下方には、明日下る予定の布引谷林道も見え、もう行者還の小屋も近い。奥駈のよく踏まれた道を、誰にも出合わず我々だけのパーティーが進む。小屋への最後の登りも過ぎ、峠状の天川辻に出た。石碑が横倒しになり、右天ヶ瀬、左川合を示している。ここから5分で行者の小屋についた。

小屋の後はすぐ行者還岳になっており、荷物を置いてすぐに三角点へ向う。明治10年頃から東面に道が開かれ、山頂をこえないルートになっている。その東面の道を辿り山上ケ岳からの道と合した所で左に振り、石楠花の群生している頂上に登る。小屋から25分、三つ目の三角点を踏み一同万才。

早々に小屋へ引返し、夕食の用意をする。ここでも高いビールで乾杯する予定だったが、残念ながら無人で、カレーライスと水で乾杯と相成った。2日間の行程で疲れた体を8時には全員シュラフに入った。

8月12日 6時起床。小屋の周囲は朝モヤで、肌寒いぐらいである。予定より早く朝食もすませ、7時25分小屋を出発する。昨日の天川辻まで戻り川合方面、小つぼ谷に向って下る。この道は余り利用されてないのか、奥駈の道とくらべると荒れている。小さな谷を渡り、小つぼ谷へと一気に下る。道が谷と合して10分、布引谷との出合に出た。もう山も終りである。奈良県が開発中の布引谷林道に飛び出すと、山行中ずっとぐづついていた天気なのに、やっと真夏らしい太陽に照りつけられた。

布引谷林道を20分、川迫川と不動谷との出合橋に着く。左の不動谷は、上流に神童子谷があり谷幅も広く、さすが大峰山系で指折り数えられるだけのものがある。橋から30分、林道に沿って歩くと関電の川迫ダムについた。道端で車座になり、いつものゴウカな昼食をとる。往きかき車の人は何事ぞ、とばかりスピードをゆるめのぞいて行く。「さあ、もう一息!!」の声で、10時50分、2日間愛車を待たせた熊渡に着いた。

川迫の谷川で一泳ぎし、冷い水で汗を流して大峰を後にする。途中、上丹生でアユの塩焼で乾杯し、うだる暑さのルート24号を京都へ帰って来た。大峰の印象をフィルムに焼付け出来ず、頭に残さねばならなくなった数々の滝や山。フィルムを忘れた0君は、当分せめられそうだ。

参加者 牧 定夫、武田喜久郎、吉田武、山田精一、岡本義弘、大観雅弘

コース・タイム

- 8月10日 京都8.30 - 11.30 川合 - 12.00 熊渡 12.40 - 13.05 林道との分岐 - 13.25 釜滝
 - 14.30 第1, 第2の滝 - 14.40 第3の滝 - 15.50 双門大滝 - 18.15 河原小屋
- 8月11日 河原小屋 7.15 - 8.20 樋の谷出合 - 9.00 猿平 9.20 - 10.15 弥山 - 10.45 八経ヶ岳
 - 11.25 弥山 11.45 - 12.20 聖宝の宿跡 - 12.50 石休の宿跡 - 13.45 一の峠 -
 - 15.25 天川辻 - 15.30 行者還の小屋 - 15.55 行者還岳 - 16.25 行者還の小屋
- 8月12日 行者還の小屋 7.25 - 8.30 小つぼ谷 - 8.35 布引谷出合 - 8.55 不動谷出合 -
 9.50 川迫ダム 10.20 - 10.50 熊渡 11.50 - 15.40 京都

例 会 報 告

例会№	目的地	月日	天候	担当者	参加者	記 事
1047	土蔵岳	7月20日		本局 宮後 正樹		勤務の都合によりやむを得ず延期 △ 1065.4m三ツ又を含め再行を期 しています。
1048	南ア 兎岳 から聖岳	7月22日 ～25日	晴	五条 坂井 久光 北野 坂田 利春	台川 敦美	別稿報告
1049	弥山川廻行 ～弥山	8月10日 ～12日	曇 一時雨	横大路 岡本 義弘	牧 定夫氏 武田喜久郎 大槻 雅弘 吉田 武 山田 精一	別稿報告

雑 報

8月集会報告

出席者 名誉部員 牧 定夫氏
 本 局 宮後、三橋
 九条第二 鷺見

8月19日

下 鴨 寮

錦 林 武田
 梅 津 吉田
 横大路 田中、岡本

№1050 例会 金草岳打合せ (参加予定: 岡本、牧、武田、田中、宮後、三橋、吉田)

白山登山大会打合せ (参加予定87名 L. 田中、石田、大槻、武田、徳野、鷺見)

以 上

ダイバー仲間へのプロショップ

- 取扱品 ● スキューバアネロ京都秘蔵老元
 ○ ホイト(※) タコ(※) クレューサブ(伊)
 マリン(仏) ブッシャーサブ(仏) NDS(日)
 キヌ川(日) スキューバプロ(※) 代理店
- 講習会 ● 現役プロダイバーによる安全確実な
 アクアラング指導

ダイビングプロショップ

〒603


エリート

京都市北区堀川通北大路上ル豊後1

TEL 075 (492) 8450




PRO SHOP
 山とスキー  
 輸入品とオリジナルの店
 AM12.00 ~ PM9.00 三条御幸町下
 定休日 月曜日 (221)6186



まかせて下さい...ネ
 山とスキー
 のことなら...

☆在庫豊富にとり揃えています
 ☆山の道具は"セビ"御相談下さい
 ☆友の会会員募集中(毎月1000円)

山とスキーの専門店


河原町店 上・河原町通丸太町東入
 烏丸店 中・烏丸丸太町南下ル東側

昭和50年 月 1 日

京都市中京区壬生坊城町48

京都市交通局内 頁 交 山 岳 部

オールスキー・山用品

大量入荷!!

交通局の皆さん
とりあえず 京菱へ
満足のいくようにします

京菱運動具店

下・大宮松原上ル
TEL 901-1331

みんな知っている
古くからの厚生会特約店
野球用具 硬式・軟式専門店

ゴルフ初心者向クラブ沢山
あります 特に偶数クラブOK
以上の商品なんでもOK
購買証御利用下さい
月賦可電話にて御注文下さい

KK西沢スポーツ

中・釜座御池下
(221) 5739

帆布・遮布
テント・シート
雨合羽


木村工業有限会社

京都市中京区ミブ車庫前
TEL 804-5331 (代)

名古屋営業所
名古屋市西区児玉町7-30
TEL 521-754 (代)~4



この用具の事ならコニシが一番です!
御来店ありがとうございます
山とスキー
そして海の レジャースポーツショップ
コニシ
中・二条通河原町西 TEL 231-1202



真の専門店として
京都山荘は前進しております
山とスキー用具の
ことなら御まかせ下さい

確信ある用具を
確信ある価格で……

京都山荘

河原町六角下ル東入ル
TEL 241-1731